

## 会話における発話者の意味と聞き手の理解

千葉大学博士前期課程1年  
岡城真代

会話を成立させるために必要な要素はなんだろうか。私たちが会話するとき、そのときになす発言が、適切な辞書的意味と適切な文法で構成され、現に伝えようとしている事柄がそれとまったく合致していなければ会話にならないなどということはない。私たちが会話をしようとするとき重要なのは必ずしもそのようなことではないのだ。それが理由である発言が奇妙だと思っても、その発言を、会話を構成する発言だとみなしうる。それは、会話という実践を支配している一般的な原理に起因するのではないだろうか。このように考えたのが、ポール・グライスである。会話実践を支配している一般的な原理をグライスは考え、この原理に則っている言葉のやりとりを「会話」として扱っている。またグライスは、その会話において、発話者の発話からなにが伝わっているのか（なにが意味されているのか）を考察するために、発話者の意味について議論している。

確かに私たちはだれも（会話を成立させようと考えているかはさておき）、さしあたり聞き手になるより以前に、話し手である。ありふれた状況を想像してみても、聞き手になるというのは案外難しいもので、話し手になっているときとは、やっていることがずいぶん異なるような気がする。もちろんグライスも聞き手のことをなにひとつ考えていないわけではないが、話し手としての私たちの能力が説明されればおよそ充分だと考えているとあってよいだろう。ただ、「会話の滞りのなさ」について考えると、やはりグライスの理論では不十分であろう。グライスは基本的に滞りのない会話を扱い、そのとき発話者によって意味されている事柄、すなわち、伝わっている事柄とはなにか探っていく。だが、グライスが提示するような適切な仕方で会話に従事していれば、伝達が可能になり、同様に適切な仕方で会話に従事する聞き手も伝達された事柄を（話し手の思惑通り）把握するのだろうか。

私としては、任意の言語使用者がふたり以上いて、お互いに「協調の原理」を遵守していて、発話に意味を与える気がある状況でのことばのやり取りは、それだけで十分会話になると認めたい。しかし、会話というものは成り立っていればうまくいくというものでもない。その成立の問題と、それがうまくいったかどうかという問題は別個の議論である。「伝わらない」あるいは「伝えられない」という状況を考えればよいのだが、こういう状況はごくふつうにありふれた状況であって、想像に難くない—とはいえ、私たちが普段従事している会話にあって「うまく伝わらない」という状況はほとんどない。気味が悪いほど滞りなく会話はうまくいくのである。

グライスの発話者の意味理論のなかで、この「滞りのなさ」を示唆するような部分がある（もちろん滞りのなさを示唆する要素をもっているのはグライスの理論だけではないが）。グライスが会話におけるその働きをどれだけ重要に感じていたかははっきりしないが、「滞りのなさ」を考えるためには重要な点になるのではないかと考えている。本発表では、まずグライスの会話理論について確認し、会話における「意味する」に着目する。次に、話し手と聞き手の働きについて考察しながら、会話のはこびにおいて「滞りのなさ」を生じさせる要素を提示したいと思う。本発表の目的は、なにが伝わっているのかではなく、なぜ伝わるのかという問題にかんする一要素の提示である。